

陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No.21

2008.12.15

第三号(24年7月号)から

『陽気』は、昭和24年5月の創刊、平成21年に60年を迎えます。その足跡の一端を、昔の記事から振り返っていきます。

除草

中山正善

まれて来たのだ。否(いな)哲学なんかと言うほどの体系あるものではないが、他人から左様に呼ばれるほどの、一家言を捨てたのである。

○

第一に私は、除草と言うことの、むつかしいことを知った。何の技巧もなく、誰にも出来る行為ではあるが、その完成には、人知れぬ努力と繰返しを要するのである。



一寸眼には地上に小さい姿を見せすぎないものが、

地下深く根を持っていて、摘み草の様式では、すぐさまその姿を見せるため、その除去は並大抵なことではない。

誰にも出来る事ではあるが、誰にでも言うほど簡単に考えられないもの、それは除草の術であることを知った。

○

第二に、諸草互いに生存競争していると言うことである。芝と言う繁殖力の強いものでありながら、必ずしも他草の存在を許さないわけではない。例えばクローバーや、血止草の類が繁殖し出すと、芝は負けてその所を彼等にゆずるのである。集団的に広がってゆく時には、鬼芝とさえ言われるような蛮(ばん)的な草ですら、押されて弱ってゆく。

クローバーや血止草は、あるいは美しい花をさかせ、やわらかな葉や茎(くき)を見せている。決して我々に鬼芝の如き固い感じをあたえるものでない。むしろ女性的な軟弱性と柔和感をあたえるものではあるが、いったん地下に有するその根や組織に至っては、どうしてどうしてそんな眼にふれたような生やさしいものではない。

数年を経て、否(いな)十数年を経て、わずかな面積の中から駆逐(くわく)するに手こずるもの、それは、クローバーであり、血止草なのである。

○

第三に、生存競争の激しい一面、また相互扶助の強いと言うことである。草々は地下

に地上に、がっちりとスクラムを組んでいる。(中略)

私は除草の間、手を動かし根を追いながら頭でこんな事を考え続けるのが常となった。除草、それは庭の掃除と言う意味から出発したことがある。しかし何時とはなく、また簡単に片づかぬままに、除草は私に人生観を教えてくれた。頭を空にした除草行為が、理論をはなれた面から、尊い尊い知識をつめ込んでくれた。経験の上から、草にもお礼申したい念を起こさせてくれた。

○

教祖様は「ほこり」と言う言葉で、心遣いの誤りを教えられた。その掃除と言うことが常々、また一番大切な日課であると教えられた。誰にもわかる「埃」のことである。誰にも出来る掃除のことである。ついうかうかとまとめておいて、一斉に除去しようと、考えやすく、日々に掃除をつむことは、考えやすくして、おこたり勝ちなことである。

(後略)

昭和二十四・三・五 何年か以前から書きたいと思っていた事である。充分ではないが一応書けたのでうれしい。

(前略)もう今年で、十年以上にもなるが、一寸した手隙に除草の手伝いをしたのがもととなって、私は除草に非常な興味を持ち、人々とも語り合って除草に入念するようになったのは、戦争以前からであった。そして戦争中も、増産の上から芝生を捨てようと思いつながらぬ、その雑草除きに、余念なかつた日が続いた。春から夏へ、それから秋へ。時には一番繁殖力の強い梅雨の頃には、蓑(かさ)を着て、庭に伏せていたこともある。また暮れやすい秋の夕には、燈火まで持ち出して、予定の区域を除草したこともある。我ながら「つまらぬ事だ」と思つた日もあつたが、やっているうちに美しくなる庭の様をよるこぶと言う意味からばかりでなく、草と草との生活様相に、実に教えられる自然の理の多いことを発見したのである。そして私の除草哲学が生

御休息所が出来たころ

獄舎への御苦勞を重ねてくださる教祖に、少しでもゆつくりお休みいただきたいと作られたのが「御休息所」。明治16年11月中旬に完成している。

そのころ、輦分教会二代會長夫人・岡本なをさんは7歳正氣を失うほどの熱と母の産後の患いを、井筒梅次郎さん（芦津大教会初代会長）におたすけいただいた。お礼に年末、父と手引きの人・立花善吉さんとおぢばへ帰っている。昭和25年7月、当時74歳の岡本なをさんの話。

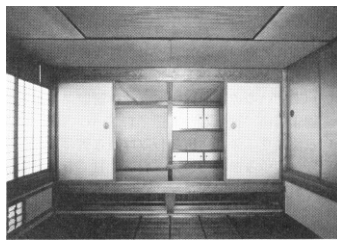
——「その時、教祖は……新築の御休息所にお移りになって間なしで、一方、のちの御本席（飯降伊蔵様、当時50歳）はそれまで教祖の住まっておいでになったという、中南の門屋の左手の部屋に移られたばかりでした。長女のおよしさんは未だ十五、六歳だったでしょう。そのほか子供さんに、まさゑ、政甚さんもおられました」——

中南の門屋の部屋（十畳）からつとめ場所に向ってささやかな渡り屋があった。その渡り屋で、むしろを敷いて質素な服装の飯降伊蔵さんが、

一心にお社か何かを造っておられたという。つとめ場所の東側の細い縁伝いに奥へ行くのと、教祖の御休息所があった。赤衣を召された教祖のお側には、梶本ひささん（教祖の三女はるさんの二女。当時20歳）がついて、まめにおぐし（髪）をといていたという。

——「父が、『真明組の岡本久太郎、只今帰らせて頂きまし』と申し上げますと、教祖は、『はあ』とにこやかにおっしゃって、御自身のお顔を右のお手で二回はらうようにされますと、そのお手をへの字型にひたいの所に持つてお

いきになりました。『ようお帰り』と、やさしく申されました。そして、『あんな、久太郎さん、これからは家のことをするのやないで、神さんは一寸目かくししてある』と申されました。これは、今後商売をさしおいておたすけに専念せよ、とのお言葉だったのをごさいますよう」



御休息所（「改訂天理教事典」より）

また、

手書き墨書の横断幕設置

感謝を込めて！
去る12月1日夕「天理本通」の一番本部寄りに横断幕を取り付けました
ぜひご覧下さい！！



「陽気」トピックス

そのとき教祖は立花さんの手の甲を人差し指と小指でにこにこつままれて、痛いほど上に持ち上げられた。
『この世、元初めた親であるしようこう』もうとしをとつたとおもうのやない、いつも二十歳前後の元氣さやで』
と言われたということである。
「御休息所」は、中南の門屋つとめ場所、内蔵などと共に記念建物として、教祖殿北側に保存されている。

（教祖の御姿を偲ぶ）改訂新版・上村福太郎著「牡丹の花盛り」を参考・抜粋）

養徳社 よもやま話

○……朝刊を見ていた妻が、「ええりつ！」と素っ頓狂な声を出す。見ると、週刊誌の広告に「噂のメソッドブラジャー装着体験記」優しくなる、仕事がかどる、目からウロコのプラス効果！」と出ていた。「着けてみたら」とニヤつく妻。俺は死んでも嫌だ。あ、そうそう、ちよつとふくよかな社内のある人に勧めてみようつと。
○……朝起きるとファンヒーターがピーと鳴いている。点け直してもエラー表示が出るだけ。何回点けてもすぐ止まる。調べるとフィルターもきれいだし、もちろん灯油も入っているのに……また出費！ また遅刻！

広告を載せませんか

ようほくの企業や会社の広告を『陽気』誌へ載せてみませんか？ 掲載料金は、広告の大きさによって異なります。料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで
0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用いただけますよう、お願い申し上げます。
養徳社

『陽気』創刊60年 記念行事と企画

期間 平成21年1月号より12月号まで
企画行事 創刊60年記念講演会（4月25日）
道柳のつどい（選者を囲んで懇親会・秋予定）
本誌新企画 著名人による天理紀行（随時） 創刊60年記念懸賞小説募集 連載随想『天理今昔物語』（天理大学名誉教授・近江昌司氏）
連載漫画『ひのき家の人々』（金巻とよじ氏）
再録・『陽気』60年（先人のおたすけ話など）
『陽気』と私（随時）
出版企画 新刊本 『お道の人の 心にのこる話』（仮題）
『道の八十年』（松村吉太郎著）
『人生に終りなし—柏木庫治を語る—』（東中央大教会編）

おかげさまで60年

『陽気』創刊60年の年（平成21年）に限り
『特別購読料』でお読みいただけます
ぜひこの機会に 身近な人にお勧めください

—創刊60年特別購読料—（1部送料共）
半年分…1,300円 1年分…2,400円
2年分…4,500円 3年分…6,500円
4年分…8,500円 5年分…10,000円
お申込は→☎0743 (62) 4503まで